広島大学大学院教育学研究科紀要　第三部　第58号　2009　139－144

高校生のキャリア意識と希望最終学歴

前田健一・新見直子[1]・加藤寿朗[2]

（2009年10月６日受理）

Career Awareness and Desired Educational Statuses of High School Students

Kenichi Maeda, Naoko Niimi[1] and Toshiaki Kato[2]

Abstract: The purpose of this study was to investigate whether high school students who desired the same educational status as their parents (consistent group) showed higher career awareness than those who desired the different educational statuses from their parents (inconsistent group). Participants were 316 tenth-graders, 290 eleventh-graders, and 278 twelfth-graders. They completed the Career Awareness Scale to measure four areas of career awareness; interpersonal relationship, information utilization, future planning, and decision-making. They also completed the Parental Support Scale and Desired Educational Status Questionnaire. The consistent group showed higher parental support score and lower decision-making score than the inconsistent group. Additionally, high school students who desired higher level of educational status showd higher information utilization and decision-making scores than those who desired lower level of educational status. These results were discussed in relation to parent-child relationship.

Key words: career awareness, desired educational status, high school students
キーワード：キャリア意識，希望最終学歴，高校生

青年期の主要なキャリア発達課題は，自分の職業的好みを明確化し，職業的好みに基づいて特定の職業を選択し，選択した職業に就くことである（Savickas, 2001）。わが国では，高校生の53.9％が大学等に，14.7％が専修学校に進学している（文部科学省，2009）。この現状を踏まえると，わが国の高校生の多くは，特定の職業を選択するとともに，将来の職業に関係する進学先を選択するというキャリア発達課題に直面しているといえよう。

欧米のキャリア発達研究では，キャリア発達課題の達成基盤となる能力・態度等の習得度をキャリア成熟度と定義し，高校生と大学生を主な対象として研究を行ってきた（Hartung, Porfeli, & Vondracek, 2005）。例えば，Patton, Creed, & Muller（2002）は，高校卒業後に大学に進学した者は，高校卒業後に就職した者や不就労の者よりも高校在籍中のキャリア成熟度が高いことを見出している。この結果は，キャリア成熟度が高い高校生ほど高学歴志向であり，専門職等の職業を目指す傾向にあることを示唆する。キャリア発達課題を達成するためには多様な能力等が必要であるが，Patton et al.（2002）に代表される欧米のキャリア成熟度研究では情報収集，将来計画，意思決定の３領域の能力・態度を共通領域としてキャリア成熟度を捉えている（新見，2008）。

他方，わが国のキャリア教育では，小学校から高校までの児童生徒が将来自分に適した職業を選択できるように，人間関係形成，情報活用，将来設計，意思決定の４領域の能力・態度を習得させることを重視している（文部科学省，2006）。これら４領域は，わが国のキャリア教育で育成しようとするキャリア成熟度の主要領域であると考えられる。これら４領域のうち，情報活用，将来設計，意思決定の３領域は欧米のキャリア成熟度の主要な３領域と対応するものである（新見，

[1] 広島大学大学院教育学研究科研究生
[2] 島根大学教育学部

2008)。これらの対応関係およびキャリア成熟度の高い高校生ほど高学歴志向を示すという Patton et al.（2002）の結果を考え合わせると，わが国でも４領域のキャリア成熟度を高めるキャリア教育は，高校生のキャリア発達や高学歴志向を促進すると思われる。

ところで，既存のキャリア成熟度研究を概観すると，キャリア成熟度に関連する主要な要因のひとつとして親子関係要因（例えば，親に対する愛着，親からのサポート，社会経済的地位）が取り上げられている。例えば，Blustein, Walbridge, Friedlander, & Palladino（1991）は，どの様な親子関係が青年のキャリア発達を促進するのかに注目し，キャリア成熟度に及ぼす親への愛着と親からの心理的分離の影響を検討している。正準相関分析の結果，両親に愛着を感じ，激しい怒りや敵意を感じない大学生ほど，職業選択に取り組む傾向にあった。この結果から Blustein et al.（1991）は，両親に対する愛着と両親からの心理的分離の双方を経験している青年ほどキャリア成熟度が高まると示唆している。女子高校生のデータに基づいて同様の検討を行った O'Brien（1996）も，Blustein et al.（1991）と同様の結果を見出している。

上述の先行研究結果（Blustein et al., 1991; O'Brien, 1996）から，親子関係が青年のキャリア成熟度に影響すると示唆される。しかし，これらの２研究で使用されている愛着や心理的分離の尺度は，親の具体的な養育行動に関する項目ではなく，愛着や心理的分離を青年がどの程度知覚しているかを自己評定する項目から構成されていた。青年のキャリア成熟度を高める親の具体的な養育行動がわかれば，親がそれらの養育行動を増やすことによって，青年のキャリア成熟度を高める可能性が期待できる。したがって，親の具体的な養育行動とキャリア成熟度の関連を明らかにする研究が必要である。

Keller & Whiston（2008）は，親の養育行動と青年のキャリア発達との関連を検討する必要性を指摘するとともに，親の具体的な養育行動と中学生のキャリア成熟度との関連を検討している。ロジスティック回帰分析の結果，親の養育行動に関する次の４項目が中学生のキャリア成熟度の高さと有意に関連していた。それらの項目は，「私の親は私にとって重要な十代の問題に興味を示す」，「私の親は私が自分で決定するようすすめる」，「私の親は，私が受けたキャリア・テストや興味目録の結果を理解するのを手伝ってくれる」，「私の親は私を誇りに思っているといってくれる」の４項目である。特に，「私の親は私が自分で決定するようにすすめる」（Exp（β）＝2.66）は，他の３項目（Exp（β）＝0.45～1.90）よりもキャリア成熟度の高さと強い正の関連を示した。この結果から，子どもの意思を尊重し，子どもの意思決定を支援する親の養育行動が青年のキャリア成熟度を高めるのに有効であると示唆される。

Keller & Whiston（2008）では中学生を対象にしていたが，わが国では中学生よりも高校生の方が進路選択の実際的な問題に直面しやすいと思われる。そこで，本研究では高校生を対象にして，高校生の希望する最終学歴を親が受け入れているか否かによってキャリア成熟度に違いがみられるか否かを検討することにした。すなわち，高校生自身が意思決定をして選択した進路希望を親が受容している場合には，高校生のキャリア成熟度も高いのではないかと考えられる。Keller & Whiston（2008）の結果を参考にすると，子どもの意思を尊重し，子どもの意思決定を支援する親は，子どもが希望する最終学歴を受け入れると考えられる。その結果，高校生の希望する最終学歴と親が期待する最終学歴が一致しやすいと考えられる。このように考えると，自分の希望する最終学歴を親も受け入れていると感じている高校生（一致群）は，親が自分とは異なる最終学歴を期待していると感じている高校生（不一致群）よりもキャリア成熟度が高いと予想される。

本研究の第１の目的は，高校生自身が希望する最終学歴と親が期待する最終学歴の一致・不一致に基づいて一致群と不一致群の２群を構成し，４領域のキャリア意識，親サポートおよび家族からの受容感について比較検討することである。家族からの受容感について２群間で比較するのは，自分の希望する最終学歴を親も受け入れていると感じている一致群の高校生が，自分とは異なる最終学歴を親が期待していると感じている不一致群の高校生よりも，家族からの受容感が実際に高いか否かを確認するためである。本研究の第２の目的は，親からの受容感や親サポートがキャリア意識とどの程度の関連を示すかを一致群と不一致群の間で比較することである。

方　法

対象者　公立高校の１年生316名（男子158名，女子158名），２年生290名（男子123名，女子167名），３年生278名（男子144名，女子134名）の合計884名（男子425名，女子459名）を対象者とした。

調査時期と手続き　調査協力校の校長から調査実施と調査内容の承諾を得た後，2007年11月下旬に学校を通じて調査を実施した。

調査内容　調査用紙は，学年と性別に関する質問の他に，次の５つの質問群から構成されていた。

表１　キャリア意識尺度項目

項目
人間関係形成
1　友だちのよいところをもっと知りたいと思う
2　友だちが困ったときには，助けることができると思う
3　友だちの気持ちを大切にすることができると思う
4　自分がいやなことは，友だちにはっきり言うべきだと思う
5　友だちのよくないところは注意すべきだと思う
6　違う学年の人とも話をしたいと思う
7　自分の気持ちや考えを友だちにわかりやすく伝えることができると思う
8　落ち込んでいても，友だちとは明るく話ができると思う
9　友だちに悪いことをしたと思ったら謝ることができると思う
10　思いやりがある人には，たくさん友だちができると思う
情報活用
1　大学や専門学校ではどんな勉強するのかを知りたいと思う
2　調べようと思ったら，インターネットなどを使って自分で調べることができると思う
3　わからないことは，先生や友だちに聞くことができると思う
4　何かを決めるときには，情報は多いほうがいいと思う
5　学校で勉強していることは，将来仕事をするときに役に立たないと思う *
6　働いている人はどのようにして，その職業についたのかを知りたいと思う
7　情報が少ないと，正しい答えが出せないと思う
8　将来どんな仕事をしたいかを今から考えなくてもいいと思う *
9　学級の係や当番の仕事は，きちんとやることが大切だと思う
10　努力しない人は，仕事で失敗すると思う
11　遊んでばかりいると，りっぱな大人になれないと思う
将来設計
1　人から頼まれたことでも，うまくできないと，やめてしまうと思う *
2　そうじや係の仕事は自分がしなくても他の人がしてくれると思う *
3　みんなで決めた係や仕事は，きちんとやりたいと思う
4　やる気になったら，家のそうじや手伝いができると思う
5　生徒は，将来のためにしっかりと勉強すべきだと思う
6　学級の仕事は，みんなで協力したほうがいいと思う
7　計画や時間を決めて勉強したいと思う
8　自分の未来は明るいと思う
9　だらだらとテレビをみないようにしようと思う
10　やる気になったら，集中して勉強することができると思う
11　忘れ物をしないように前の日から用意することが大切だと思う
12　宿題や勉強は言われてからやればいいと思う *
意思決定
1　何でも最後は自分で決めたいと思う
2　みんなと意見が違っても，自分の意見を言うことができると思う
3　遊びに行く前に勉強や宿題をすませるほうがいいと思う
4　自分ひとりで決めるよりも，人に相談してから決めたほうがいいと思う
5　すぐにできなくても，できるまでがんばろうと思う
6　失敗しても，あきらめずに，うまくいくまでがんばろうと思う
7　友だちとけんかしても，うまく仲直りができると思う
8　難しいことでも，やる気になったら，できると思う
9　がんばって苦手なことを少なくすることが大切だと思う

注）「*」：逆転項目を表す。

①高校生の希望最終学歴：高校生が希望している最終学歴を，「１．高校卒業」，「２．高等専門学校卒業」，「３．専門学校卒業」，「４．短期大学卒業」，「５．大学卒業」，「６．大学院卒業」，「７．その他」の７つの中から１つ選択するよう求めた。

②親の希望最終学歴：高校生に対して，家の人が自分に希望していると思う最終学歴を，「１．高校卒業」，「２．高等専門学校卒業」，「３．専門学校卒業」，「４．短期大学卒業」，「５．大学卒業」，「６．大学院卒業」，「７.その他」の７つの中から１つ選択するよう求めた。

③キャリア意識：新見・前田（2009）が高校生を対象に作成したキャリア意識尺度を使用した。この尺度は，人間関係形成10項目（α = .75），情報活用11項目（α = .68），将来設計12項目（α = .73），意思決定９項目（α = .71）の４領域42項目から構成されていた（表１）。各項目に対する回答は，新見・前田（2009）と同様の６段階評定（１：とてもそう思わない～６：とてもそう思う）であった。各領域の項目数が異なるので，領域別に平均値を算出して，それを各領域得点とした。したがって，各領域得点の範囲は１点から６点である。

④親サポート：既存のソーシャルサポート尺度（例えば，嶋，1994）を参考に，12項目から構成される尺度を独自に作成した（表２）。回答方法は，家の人がこれら12項目のサポートをしてくれると思う程度につ

表２　親サポート項目

項目	負荷量
1　定期テストや模擬試験の結果が悪かったときに励ます	.58
2　進路選択で迷っているときに，アドバイスをしてくれる	.78
3　嬉しいことがあったとき，一緒に喜んでくれる	.75
4　あなたが進路選択について相談したらまじめに聞いてくれる	.78
5　自分の能力や努力を認めてくれる	.76
6　進路のことで悩んでいるときに，相談にのってくれる	.85
7　受験や就職のことについて一緒に調べてくれる	.69
8　ふだんから自分の気持ちを理解してくれる	.74
9　受験校や進路先の情報を集めてきてくれる	.56
10　あなたの体調管理や栄養管理をしてくれる	.47
11　進路を決めるときに，あなたの意見を尊重してくれる	.50
12　将来の進路や職業について，いろんな話をしてくれる	.70
寄与率	47.44
α 係数	.91

いての５段階評定（１：まったくしてくれない～５：とてもしてくれる）であった。12項目について因子分析（重み付けのない最小二乗法）を行ったところ，１因子性が認められた。そこで，12項目の平均値を算出し，それを親サポート得点とした。したがって，親サポート得点の得点範囲は１点から５点である。

⑤家族からの受容感：高校生が家族から受容されていると感じている程度を測定するために，「自分は家族から愛されていると思う」と「家族は私のことをよく理解してくれていると思う」の２項目を独自に作成して使用した。これら２項目があてはまると思う程度について５段階（1:まったくあてはまらない～５：とてもよくあてはまる）で自己評定させた。２項目の平均値を算出し，それを家族からの受容感得点とした。したがって，家族からの受容感得点の得点範囲は１点から５点である。

結　果

希望最終学歴の内訳　高校生が希望する最終学歴と親が彼らに希望していると思う最終学歴について，人数集計を行った（表３）。表３からわかるように，多くの高校生（72.3%，639/884）が最終学歴として大学卒業を希望していた。また，自分の最終学歴として親が大学卒業を希望していると思う高校生も多かった（75.1%，664/884）。なお，表３では，希望最終学歴について未記入の者を希望なしとして分類した。

表３　希望最終学歴の人数内訳

	高校生	家の人
希望なし	65	102
高校卒業	4	11
高等専門学校卒業	1	1
専門学校卒業	34	18
短期大学卒業	33	27
大学卒業	639	664
大学院卒業	108	54
その他	0	7

群構成　分類の結果（表３），高校生と親の大多数が大学卒業を希望していたので，希望なしを除く７つの希望最終学歴別に一致群と不一致群を比較するためには十分な人数を確保できない群が生じる。そこで，次の２つの手続きによって高校生を再分類した。本研究の目的に基づくと，高校生の希望最終学歴が親に受け入れられているか否かに基づいて群構成を行う必要がある。そこで第１に，希望なしの高校生を除いて，高校，高等専門学校，専門学校，短期大学，その他を希望する者から構成される「専門・短大」，大学を希望する者から構成される「大学」，大学院を希望する者から構成される「大学院」の３つに再分類した。第２に，親の希望最終学歴を「希望なし」,「専門・短大」,「大学」,「大学院」に分類し，高校生の希望最終学歴と組み合わせた（表４）。

上記の手続きに基づく再分類の結果，親と希望の一致する者が希望の一致しない者よりも多かった（表４）。この結果を踏まえると，再分類をした場合でも，希望最終学歴別に一致群と不一致群の群間差を検討することは難しいといえる。そこで，次の２つの分析を行うことにした。第１に，希望最終学歴を区別しないで，家族からの受容感得点，親サポート得点，４つのキャリア意識得点について，一致群と不一致群間で群間比較を行う。第２に，一致群のデータに基づいて３つの希望最終学歴間で４つのキャリア意識得点の比較を行う。

表４　高校生と親の希望最終学歴の対応関係

		高校生		
		専門・短大	大学	大学院
家の人	希望なし	11	24	9
	専門・短大	43	18	0
	大学	18	594	48
	大学院	0	3	51

群間比較　まず，家族からの受容感得点に基づいて一致群（$n=688$）と不一致群（$n=131$）の比較を行った。その結果，家族からの受容感得点では，有意傾向がみられ（$t(817)=1.89$, $p=.06$），一致群（$M=3.69$）が不一致群（$M=3.54$）よりも高い傾向にあった。

次に，親サポートとキャリア意識得点について群間比較を行った。その結果，親サポートでは，有意差がみられ（$t(817)=2.92$, $p<.01$），一致群（$M=3.33$）が不一致群（$M=3.11$）よりも有意に高かった。また，４つのキャリア意識得点のうち，意思決定で有意差が認められ（$t(817)=2.11$, $p<.05$），不一致群（$M=4.41$）が一致群（$M=4.29$）よりも有意に高かった。

一致群の希望最終学歴間比較　４領域のキャリア意識得点について３（希望最終学歴）×３（学年）の多変量分散分析を行った（表５）。その結果，希望最終学歴の主効果（Wilks's $\Lambda=2.54$, $p<.05$）のみが有意であった。領域別にみると，情報活用（$F(2, 679)=3.82$, $p<.05$）と意思決定（$F(2, 679)=3.88$, $p<.05$）で有意差が認められた。下位分析の結果，情報活用では大学院希望（$M=4.63$）が専門・短大希望（$M=4.31$）や大学希望（$M=4.42$）よりも高かった。意思決定では，

大学院希望（$M=4.52$）が専門・短大希望（$M=4.22$）や大学希望（$M=4.27$）よりも高かった。

キャリア意識と他の各変数間の相関係数　表６は一致群と不一致群別に，家族からの受容感や親サポートとキャリア意識４領域との相関係数を示したものである。表６からわかるように，一致群では家族からの受容感も親サポートもキャリア意識４領域すべてと有意な正の相関を示している。それに対して，不一致群では家族からの受容感はキャリア意識のいずれの領域とも有意な相関を示さなかった。

表５　希望最終学歴別の平均値と標準偏差（*SD*）

		専門・短大	大学	大学院
人間関係形成	1年生	4.12 (0.67)	4.25 (0.60)	4.45 (0.46)
	2年生	4.25 (0.60)	4.20 (0.58)	4.01 (0.57)
	3年生	4.59 (0.63)	4.14 (0.71)	4.32 (0.71)
情報活用	1年生	4.12 (0.54)	4.44 (0.57)	4.73 (0.53)
	2年生	4.28 (0.69)	4.41 (0.56)	4.36 (0.66)
	3年生	4.54 (0.52)	4.43 (0.54)	4.79 (0.51)
将来設計	1年生	4.26 (0.41)	4.41 (0.53)	4.62 (0.40)
	2年生	4.49 (0.58)	4.45 (0.55)	4.42 (0.75)
	3年生	4.48 (0.37)	4.45 (0.60)	4.83 (0.46)
意思決定	1年生	4.09 (0.42)	4.31 (0.57)	4.72 (0.49)
	2年生	4.20 (0.78)	4.28 (0.60)	4.29 (0.61)
	3年生	4.36 (0.54)	4.23 (0.64)	4.53 (0.54)

注）専門・短大の１年生は18名，２年生は16名，３年生は９名であった。大学の１年生は228名，２年生は196名，３年生は170名であった。大学院の１年生は12名，２年生は22名，３年生は17名であった。

表６　キャリア意識と他の各変数間の相関係数

		一致群 (n = 688)	不一致群 (n = 131)	全体 (n = 884)
人間関係形成	受容感	.34 **	.07	.28 **
	サポート	.28 **	.25 **	.25 **
情報活用	受容感	.27 **	.10	.24 **
	サポート	.27 **	.28 **	.26 **
将来設計	受容感	.33 **	.14	.30 **
	サポート	.34 **	.26 **	.32 **
意思決定	受容感	.33 **	.11	.30 **
	サポート	.27 **	.17 *	.25 **

注）表中の受容感は家族からの受容感を，サポートは親サポートを意味する。$^{*}p<.05$, $^{**}p<.01$。

考　察

本研究の第１目的は，自分と親の間で希望最終学歴が一致する一致群の高校生が自分と親の間で一致しない不一致群の高校生よりも，キャリア意識が高いか否かを検討することであった。この目的を検討する前に，家族からの受容感について群間比較を行った。その結果，一致群の高校生が不一致群の高校生よりも家族から受容されていると感じている傾向にあった。親サポートでも有意な群間差がみられ，一致群が不一致群よりも，親から勉強や進路選択に関する具体的なアドバイスやサポートを受けていると知覚していた。これらのことから，一致群の高校生は不一致群の高校生よりも，自分の親を子どもの意思を尊重し，子どもの意思決定を支援する親であると知覚しているといえよう。

キャリア意識では，人間関係形成，情報活用，将来設計の３領域では明確な群間差は見出されなかった。表４からわかるように，一致群では大多数（86.3%，594/688）が最終学歴として大学卒に集中している。それに対して，不一致群では最終学歴として専門・短大卒を希望する高校生（29名）と大学院卒を希望する高校生（57名）が混在している。不一致群では，キャリア意識が高いと考えられる高学歴志向の大学院卒と比較的低いと考えられる専門・短大卒を一括してキャリア意識の平均得点を算出したために，一致群の平均得点と大差が生じなかったものと考えられる。

また，意思決定では予想に反して，不一致群が一致群よりも高い結果が得られた。不一致群の意思決定が一致群よりも高かったことについては，次のように考えることができる。表４をみると，不一致群のうち親の期待よりも高い最終学歴を希望している高校生（110名）は，親の期待よりも低い最終学歴を希望している高校生（21名）よりも多いことがわかる。もし親の期待よりも高い最終学歴を希望している高校生が親の意思よりも自分の意思決定をより重視するのであれば，不一致群の大多数の意思決定得点は高くなる可能性がある。この可能性を確認するために，意思決定得点について，親の期待よりも高い最終学歴を希望している高校生（110名）と親の期待よりも低い最終学歴を希望している高校生（21名）の間で比較した。その結果，有意傾向がみられ（$F(1, 129)=3.10$, $p=.08$），親の期待よりも高い学歴を希望している高校生（$M=4.63$）が親の期待よりも低い最終学歴を希望している高校生（$M=4.37$）よりも高い傾向にあった。この結果から，不一致群には親の期待よりも高い最終学歴を希望している高校生が多いので，一致群よりも不一致群の意思決定得点が高くなったものと考えられる。

次に，一致群に限定して，希望最終学歴間でキャリア意識の比較を行った結果，情報活用と意思決定において，大学院希望の者が専門・短大希望や大学希望の者よりも高い得点を示した。この結果は，高校生自身も親も高学歴志向の場合には，そうでない場合に比べてキャリア意識が高まることを部分的に確証するものである。これまで高校生が希望する最終学歴とキャリア意識との関連を検討した研究はみられないが，

Creed, Patton, & Prideaux（2007）の研究は，本研究の結果を解釈する上でひとつの示唆を提供する。Creed et al.（2007）は，学業成績の自己評価が高い高校生ほど，将来のキャリア計画やキャリア探索を積極的に行う傾向が強いことを見出している。もし学業成績が高い高校生ほど将来のキャリア計画を積極的に行い大学院卒業等の高学歴を志向するのであれば，高学歴志向の高校生のキャリア意識が高いだけでなく学業成績の高い高校生のキャリア意識も高くなると考えられる。本研究では高校生の学業成績を測定していないが，学業成績，高学歴志向およびキャリア意識との関連を検討することは今後の興味深い研究課題である。

本研究の第２目的は，親からの受容感や親サポートとキャリア意識との関連度を一致群と不一致群の間で比較することであった。表６からわかるように，一致群では有意な正の相関がみられたが，それほど高い相関値ではなかった。しかし，それ以上に不一致群では低い相関値がみられた。家族からの受容感が家族に対する愛着を反映していると考えれば，一致群の結果はBlustein et al.（1991）を支持し，不一致群の結果は一部支持しない。親からの受容感では不一致群が一致群よりも低い傾向にあったことから，親が期待する最終学歴と一致しない最終学歴を希望している高校生は，親に対する愛着がやや低くなり，その結果としてキャリア意識との関連が不明確になったのかもしれない。

最後に，本研究の問題点と今後の課題を２つあげる。第１に，本研究で構成した一致群には大幅な偏りがみられた。高校生も親もともに大学卒を希望するものが圧倒的に多かった（表３）。これらの実情から，今後は志望する専攻等が高校生とその親で一致しているか否かに基づいて群を構成し，キャリア意識の比較検討を行う研究も必要かもしれない。第２に，本研究では高校生の希望最終学歴に基づいて分析を行った。しかし，希望最終学歴を規定する要因の検討はしていない。親子関係以外にも親の経済力や学業成績等も高校生の希望最終学歴に影響すると考えられる。これらの要因の影響力を比較検討する研究が今後求められる。

【引用文献】

Blustein, D. L., Walbridge, M. M., Friedlander, M. L., & Palladino, D. E. (1991). Contributions of psychological separation and parental attachment to the career development process. *Journal of Counseling Psychology*, **38**, 39–50.

Creed, P. A., Patton, W., & Prideaux, L.-A. (2007). Predicting change over time in career planning and career exploration for high school students. *Journal of Adolescence*, **30**, 377–392.

Hartung, P. J., Porfeli, E., & Vondracek, F. W. (2005). Child vocational development: A review and consideration. *Journal of Vocational Behavior*, **66**, 385–419.

Keller, B. K., & Whiston, S. C. (2008). The role of parental influences on young adolescents' career development. *Journal of Career Assessment*, **16**, 198–217.

文部科学省（2006）．小学校・中学校・高等学校キャリア教育推進の手引き：児童生徒一人一人の勤労観，職業観を育てるために

文部科学省（2009）．平成21年度学校基本調査速報　文部科学省　2009年８月〈http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/001/08121201/1282646.htm〉（2009年８月28日）

新見直子（2008）．中学生版キャリア意識尺度の開発　広島大学大学院教育学研究科紀要第三部（教育人間科学関連領域），**57**，225–233.

新見直子・前田健一（2009）．小中高校生を対象にしたキャリア意識尺度の作成　キャリア教育研究，**27**，43–55.

O'Brien, K. M. (1996). The influence of psychological separation and parental attachment on the career development of adolescent women. *Journal of Vocational Behavior*, **48**, 257–274.

Patton, W., Creed, P. A., & Muller, J. (2002). Career maturity and well-being as determinations of occupational status of recent school leavers: A brief report of Australian study. *Journal of Adolescent Research*, **17**, 425–435.

Savickas, M. L. (2001). A developmental perspective on vocational behavior: Career patterns, salience, and themes. *International Journal for Educational and Vocational Guidance*, **1**, 49–57.

嶋　信宏（1994）．高校生のソーシャルサポートネットワークの測定に関する一研究　健康心理学研究，**7**，14–25.